産業カウンセリング 理論と私の実践 ❖ 2

ナビゲーター

生き方に関わるキャリアコンサルティング

社会福祉現場での就労支援

私は社会福祉事務所の就労支援員として仕事をしている。今回は、キャリアコンサルティング（職業や仕事に関する相談）の基礎的プロセス論と、社会福祉現場での就労支援について、具体例（守秘義務上いくつかの事例に基づく架空事例）を挙げてご紹介したい。

Eさん（45歳、男性）。中学卒業後から派遣でライン作業を中心に従事。派遣先を退職後、仕事が見つからず、生活保護を受けることに。就労支援を希望。

キャリアコンサルティングの初期から全期間を通じて大切なのが「信頼関係の構築」である。カギになるのは「傾聴」だ。クライエント（支援対象者。以下「CL」と記す）を尊重し、CLの立場になって聴き、共感的に感じ取ることである。簡単ではない。Eさんは前の職場の上司のことを「殺したいほどです」と言った。そんな発言も「受容」する。そしてそれを「共感的に理解」するために、「殺したいほどなのですね。よろしかったら、それほどに思う何があったのかお話しいただけますか」と、Eさんの状況や気持ちをお聴きしていく。

このようにして、面談を重ねていく中でCLの訴えたい問題がCLの言葉になっていく。これを「CL視点の問題」という。同時にキャリアコンサルタント（以下「CC」と記す）は「CC視点の問題」を把握していく。これは専門家として見るとどこに問題があるかというCCの見立てである。Eさんのケースについてのcc視点は複数あるが、その一つに「後半生に向けたキャリアビジョン（自分のありたい姿）が描けていない」という問題があった。今までしてきたような派遣のライン作業は、40歳以降は年齢とともに派遣先が限られ待遇も悪化する傾向がある。今回を「転機」として、後半生について何を生きがいとしてどんな仕事をしていくのかを考えてみたらどうか。そんな観点を私は持っていた。しかしCC視点をCLに押し付けることはせず、面談の中でCLに気付いていただくような関わりをする。そしてCL視点とCC視点を融合させながら、解決のための「目標設定」をし、CLとの「目標共有」を図る。Eさんは介護職へのキャリアチェンジを目指すことになった。

次は「方策の実行」。目標実現のための方策を立てCLが実行。CCがサポートする。Eさんは、特別養護老人ホームの介護補助職員として就労し、職場の支援で介護資格取得のためのスクールに通うことになった。その後は「適応支援」。Eさんが新しい仕事や環境に馴染めるようサポートする。Eさんは介護の資格を取得、生活保護を脱して自立。目標達成によりキャリアコンサルティングは「終結」した。

社会福祉現場でのキャリアコンサルティングは、このようにCLの生き方に大きく関わることが多い。やりがいと責任を感じながら微力を尽くしている。

【日本産業カウンセラー協会中部支部講師・2級キャリアコンサルティング技能士 渡辺英明】

（火曜日に掲載）